

柳田国男の『真澄発見』

——羽柴雄輔との交流をとおして——

田 中 宣 一

はじめに

確かな生地や生年、生い立ちについてはわからない謎の人と言われながら、菅江真澄は民俗学研究者のあいだではあまりにも有名である。近年ではマスコミにとりあげられることも多く、しだいに一般の人々にも知られるようになってきた。

菅江真澄は、文政十二年（一八二九）七月十九日に現在の秋田県角館市の神官鈴木氏のところで病没し、そのとき享年七十六歳とされていたことから、出生は宝暦四年（一七五四）だろうと推定されている。生地は現在の愛知県の豊橋市かその近辺であるらしい。若いころに国学や本草学を学び、天

明三年（一七八三）に郷里を出てからは洗馬（塩尻市）を中心に信濃国（長野県）に一年ほど滞在し、天明四年（一七八四）九月に現在の山形県に入った。その後は晩年にいたるまで奥羽地方各地を旅して歩き、その間、蝦夷地（北海道）へも渡った。最もよく歩いたのは現在の秋田県内だったようで、晩年に近くなって何人かの秋田藩士との交友もあり、秋田藩九代藩主佐竹義和にも会見し、藩内での地誌作成にも関わったのであった。

姓は白井・名は英二といったが、知之その他の名も名のつた。三十歳前後から白井秀雄と称すことが多くなり、白井真隅や白井真澄などを使ったあと、五十歳代半ばより菅江真澄を用いるようになった。龐大な著作を残したにもかかわらず、ついに家族のことや、郷里における幼少青年時代の行動や郷里を出奔した理由を明かさず、また、奥羽地方に入ったあと晩年にいたるまでさしたる定住の地もないまま奥州各地の漂泊に明け暮れたため、謎につつまれた人物とされている。しかし、現在残されているものだけでも『菅江真澄全集』全十二卷（他に別巻二）に纏められている浩瀚な著作をなしたことは事実であるし、そのうちの数多くの日記風紀行文（『真澄遊覧記』と総称されている）は、江戸時代後期の奥羽地方を中心に信濃国や蝦夷地の民俗文化を知るまたとない好資料となっている。それら紀行文の多くには、丹念な筆致の数多くの絵が添えられていることも資料の価値を高めているのである。そのため、早くから菅江真澄についての研究はなされてきた。特に昭和四十年代以降は、先の『菅江真澄全集』の発刊とともに研究が盛んになり、第二の故郷ともいべき秋田県を中心に『菅江真澄

研究』誌まで刊行され、また近年には菅江真澄についての研究史や充実した研究文献目録などを含む『菅江真澄研究の軌跡』⁽¹⁾が上梓されて、研究は新たな段階に入りつつあるように思われる。

菅江真澄の研究は、秋田においては明治時代からなされていたが、一部の人々を除く全国の研究者に、真澄の学風や人となり、彼の紀行文の魅力や資料的価値が広く注目されるようになったのは、昭和十七年にまとめられた柳田国男の『菅江真澄』⁽²⁾によってではないだろうか。『菅江真澄』は昭和初期に発表した真澄関係の論考に真澄の旅年譜を付して刊行され、その後の真澄研究の大きな拠りどころとなった。柳田は真澄の諸業績の最大の理解者であるとともに、研究者・紹介者でもあり、真澄ファンでもあったのである。

柳田がある程度まとまった文章として真澄を紹介した最初のもは、大正九年の「還らざりし人」⁽³⁾である。真澄の生地近くを旅した途次に思い出すまま記した短篇ながら、ここには真澄の生涯が凝縮して描かれており、すでにこの時期、柳田は相当多くの真澄の紀行文を読み込んでいたことがわかる。それでは、柳田の学問背景を考える場合に無視できない菅江真澄の著作に柳田が触れたのは、いつごろのことであろうか。柳田は、昭和三年三月に発表した「霜夜談」のなかで、次のように述べている。

十七八年以前に、自分が始めて『真澄遊覧記』なるものを読んで、何とかしてこの感激を友に分
かちたいと思つた⁽⁴⁾（下略）

昭和三年から十七、八年前といえ、明治四十三、四年ということになり、柳田はこのとき初め

て真澄の日記風紀行文を読んで、感激したというのである。おそらく、精細な絵を付した奥羽地方の地誌的記述、農山漁村民の行事や日常諸生活の描写に魅了されたのであろう。このころ柳田は、内閣法制局参事官のかたわら、内閣官房の記録課長として内閣文庫管理の任にも当たっていたので、読んで感激した「真澄遊覧記」が内閣文庫蔵のものであったのは間違いない。これは多くの研究者の認めるところであらう。

それはそれとして、柳田国男の「真澄発見」を考えるとき、もうひとつ重要な事実のあったことを忘れてはならない。

それは、柳田が明治末期から大正初期にかけて「諸国叢書」の編纂を熱心に企てていたことであり、⁽⁵⁾編纂の過程で羽柴雄輔なる人物と出会い、羽柴が所蔵する真澄の「齧田乃苜寝」（あきたのかりね）の写本の謄写を乞うて精読するとともに、それを「諸国叢書」の一冊に加えていることである。そして「齧田乃苜寝」は、内閣文庫には架蔵されていないものであった。

羽柴雄輔については今ではほとんど知る人がなく、多くの菅江真澄研究においても、管見のおよぶかぎり柳田の真澄発見と関わらせて羽柴雄輔に注目した論考は見当らない。そこで小稿では、まだ不明な部分は少なくないが、手許に収集してある資料に基づいてひとまず羽柴雄輔なる人物の素描を試みたあと、柳田国男の「真澄発見」にとって羽柴が重要な役割を果たしていたのではないかという、筆者の年来抱いてきた考えを開陳したい。菅江真澄の真価を評価し真澄を広く世に紹介したのが柳田

国男であるだけに、これはまた、菅江真澄研究の一部をなすものだと考えている。

一、羽柴雄輔について

羽柴雄輔は嘉永四年（一八五二）六月二十二日に、医師羽柴養倫の子として現在の山形県飽海郡松山町で生まれ、大正十年十二月五日に東京において没した。享年七十歳であつた。⁽⁶⁾

松山は庄内藩の支藩松嶺藩の地である。羽柴は若年のころ藩士阿部灌策や海保弁之助らに漢字を学び、のち松嶺藩の藩校里仁館の教師（実際には章句師という助手のような役だった）に選出された。江戸に遊学したこともあり、ちょうどそのとき、薩摩藩邸焼打ち事件が起き、庄内藩の一員として参戦した仲間から見聞きしたことを、「薩摩屋敷討入の話」としてまとめている。また、十七歳のときに庄内藩兵の一員として戊辰戦争にも参戦し、そのときに庄内藩のとつた行動の正当性を主張し、庄内藩に対し朝敵の汚名を着せた西軍を批判した論評も残している。

明治維新後は、さらに元松嶺藩士松森胤保⁽⁷⁾について漢学や博物学を修業するとともに、酒田や鶴岡の伝習学校を終了し、明治七年以降同二十三年にいたるまで、山形県内北西部のいくつかの学校（尋常小学校）の教員を歴任した。⁽⁸⁾この間、明治十四年九月の明治天皇の巡幸に際し、東田川郡清川村の行在所博物館に、当地出土の石器・土器類を展示したことがあつたらしく、その業務のため羽柴は、

その前後一カ月間ほど東田川郡役所から博物館掛りに任用され、同館に勤務している。展示品の中には羽柴所蔵の物品もあつたらしく、これらのことから、羽柴は当時すでに、考古学者として近辺で知られた存在だつたことがわかるのである。また、このときの様子を松森胤保に知らせた書翰のなかでアメリカ人のE・モースの大森貝塚発掘に触れ、モースが出土した人骨などから日本人はかつて食人人種であつたかもしれないと述べたらしいことを取り上げ、この説に強く反駁している⁽⁹⁾。この反駁の調子といい、戊辰戦争についての庄内藩の擁護と西軍への批判といい、青年時代の羽柴雄輔は相当の熱血漢であつたことがうかがえる。

羽柴が赴任した最後の学校は、西田川郡の鼠ヶ関尋常小学校である。明治二十一年三月九日より、依願退職する同二十三年八月二十六日まで、訓導として奉職した。この間の彼の行動の一端は、赴任当初から翌年一月にかけて折々書き継いだ彼の『鼠関日記』⁽¹⁰⁾によつて知ることができる。内容には公務関係のことはあまりなく、ほとんどが鼠ヶ関村(現・温海町)を中心とした西田川郡一帯の名所や祭礼見学の小旅行、目にとまつた考古遺物への関心、地域の漁撈習俗、年中行事の記述で占められてゐる。そのうち、村社巖島神社の祭礼については、厳重な精進、神輿の浜下り、神饌の内容や供しかた、神官への儀礼的悪口などに注意が払われており、彼の祭礼に対する観察眼の適確さをうかがうことができる。小国村の熊野神社祭礼については、祭礼行列がスケッチとともに詳述されていて、貴重な報告だといえよう。これら祭礼の見学記録といい、漁撈習俗や年中行事の記述といい、菅江真澄の視点

に通底するものが認められ、後年、羽柴が「齋田乃菟寝」に心ひかれたわけが理解できる。

また、彼は、赴任の年の秋に早速、選挙によって西田川郡西部の教員会会長に選ばれている。これには、三十歳半ばという働き盛りであったこともさることながら、訓導の資格が大きくものをいっただけであろう。『鼠関日記』には多くの尋常小学校教員が登場しているが、訓導であるのは羽柴一人である。あとは授業生といういわば代用教員ばかりであり、羽柴は小学校教員としてはエリートだったのである。当然、会長に選ばれるだけの人柄も備えていたと思われる。彼が鼠ヶ関尋常小学校へ赴任するときには家族を伴ったが、その途次の幼い子息雄一の様子を、「此日雄一笠取山半過及米子村ヨリ温海村ノ南式丁斗リノ所迄又鼠ヶ関村痘瘡神ノ所ヨリ奥屋入ヘノ橋マテ都合一里余歩行セリ」として、ようやくヨチヨチ歩きを脱したくらいの足元たどどしい子息が、たどどしいながらも懸命に歩く姿をわざわざ書き留める子煩悩ぶりをみせているし、最初落着いた宿舎曹源寺から一カ月半ばかりで他へ転宅する理由の第一に、「寺中椽高ク且門前ノ石階高クシテ雄一遊戯ノ際怪我セサルヲ保ス難シ」として、幼な児を気づかっている点などに、彼の人柄をしのぶことができるのである。また、後述するような奥羽人類学会創立にみせたリーダーとしての性格も兼ね備えていたと思われる。

鼠ヶ関尋常小学校に赴任するよりも前の明治十九年三月に、羽柴は結成されてまもない東京人類学会に入会している。そして、同学会の機関誌『人類学雑誌』（『東京人類学会報告』）には第一巻六号から論文を発表し、生涯、五十編ほどの論文・報告類を世に問うている。羽柴のこの方面の研究につい

ては次節で触れるが、発表内容は現在でいう考古学・民俗学関係がほとんどで、松森胤保に博物学を教わった影響が大きいと思われる。『鼠関日記』において、五月のある日曜日に同僚や生徒と連れだつて堀ノ内村方面を遊び歩いた際に見た鱒鮭漁の小屋を、「曾テ余カ豎穴ノ遺風ナルベシト説ヲ立テ人類学会ニ投書セルモノト同様ナリ」と述べているが、この投書とは『東京人類学会雑誌』通卷二十五号（明治二十一年三月発行）に載つた羽柴雄輔「豎穴ノ遺風今尚莊内地方ニ存セリ」を指しているのであろう。

考古・民俗に関心を持っていたため、公務のかたわら山形県内を歩きまわっていたことは想像に難くないが、『鼠関日記』によると、前年すなわち明治二十年には岐阜県の飛驒山中を旅したことが述べられており、県外に出ることも少なくなかつたようである。また、明治二十二年五月から六月にかけて約半月間、東京人類学会会長の神田孝平に随行して東海東山畿内北陸方面を巡見に歩いたこともあつた。

そのときのことかどうかはわからないが、このころ奈良旅行もし、法隆寺の仏像などをたくさん見て、ものによつては拓本をとっている。愛知県知多半島の醤油屋に所蔵されていた多くの発掘品の写生をしたこともあるようである。

明治二十三年八月をもつて鼠ヶ関尋常小学校を依願退職（退職理由未詳）したあとは教職からまったく身を退き、明治三十年代後半までの十五年間ほどを、すなわち羽柴雄輔にとつて三十歳代後半か

ら五十歳代前半までの働き盛りを、園芸に従事したのである。同時にこの十五年間は、学術研究の面では最も充実旺盛の時期であり、『人類学雑誌』（『東京人類学会雑誌』を含む）を中心に論文・報告を発表しつづけるとともに、中央・地方の多くの研究者との交流もいっそう深まり、また、奥羽人類学会を組織し、その中心的存在として活躍したのであった。その一方で、古書の収集・筆写にも力を注いだ。これらについては次節で述べるので、ここでは園芸の面を少しみておきたい。

とはいっても、園芸活動に関する資料が筆者の手許に十分にあるわけではない。ただ確実にいえることは、明治二十五年十一月に、庄内地方の第一回家禽品評会に黒色レグホン雌雄二組を出品し四等に入賞したことと、同二十九年十一月に、飽海・東田川・西田川三郡の農産物品評会に葦菓（林檎のこと）を出品して二等賞に輝いていることである。農家の生まれでもなく、今まで農業に従事した形跡もみられない羽柴にとっても、水田稲作農業などにくらべ養鶏や果樹栽培は新しい農業と思えたらしく、精力的に取り組んでいた様子がうかがえる。生来、何ごとにも研究熱心な人物だったのである。

次節で述べるように、羽柴は、秋田の真崎勇助と親交があり盛んに書翰を往復させている。その中の一つ、明治二十六年九月五日発信の真崎から羽柴宛てたものに「日本家禽協会御入会ニ而養鶏へ御取かかり候よし中々御熱心之事に御座候」と記されており、庄内地方の家禽品評会に入賞した前後に、羽柴は、日本家禽協会という全国的団体にも入会していたことがわかり、この事業に専念しようと思っていたのであろう。

園芸の規模がどれくらいであったのか、仕事が十分な成功をおさめたのかなどはわからないが、十五年近くそれに従事したあと園芸から離れ、明治三十六年十月以降、三年間ほど鶴岡の普通学会というところに講師として勤め、その後、羽柴は郷里をあとにし東京へ出たのである。何か期するものがあつたのであろうが、上京の理由は未詳である。⁽¹⁾

上京後の羽柴は、明治三十九年十一月二十二日、東大の史料編纂所に、史料編纂掛写字生として勤務することになった。羽柴は、青年時代から郷里において考古遺物の収集・研究者として知られる一方、郷土史類をはじめとした古書の収集や筆写保存にも熱心であつたから、写字生という職は、晩年にさしかかろうとしていた羽柴にとって趣味と実益を兼ねた適職と思われたのであろう。七年間写字生として勤め、大正二年十月二十七日に依願解雇されている。その間に多くの東京人士と交わるのであるが、そのなかに柳田国男も含まれていたのである。

史料編纂所の写字生を退いたあとは、慶応義塾大学図書館に勤め、最晩年にいたるまで仕事を続けていたようである。

二、羽柴と真崎勇助の交流

羽柴雄輔は博物学を学んだ松森胤保の影響を受け、青年時代から考古学に関心を持っていた。その

一端については前節においても述べたが、研究心は旺盛で、中央学界の坪井正五郎や神田孝平、鳥居龍蔵らとも交流があり、ついには明治二十三年に奥羽人類学会まで結成させたのである。また、出土遺品とともに絵画・墨跡にも関心を寄せ、古書の収集にも熱心であった。古書は購入することも多かったであろうが、借用して筆写保存するよう心がけていたようである。

教職を退き園芸に従事した羽柴は、時間の融通がきくようになったためか、右のような諸方面にいつそう磨きをかけたように思われる。本節ではそのへんの事情を、真崎勇助からの来信を中心に垣間見てみたい。

羽柴が自分自身について直接語った記録は、管見のおよぶかぎり、先の『鼠関日記』以外ほとんどない。しかし羽柴は、生来几帳面な性格であったためか、古書の収集に熱意を示したような熱心さで、書翰を交わした相手からの来信を保存した。単に保存するだけでなく、それらを「か里のおとつれ」上・下のように書冊形式に綴じたり、同一人からの来信を糊付けしひとまとめに巻物形式にして保管したのである。散逸を防ぐためでもあり、また、いつでも取り出して朋友に思いを馳すためでもあったかと思われるが、実に小まめな配慮であった。これらは、羽柴の記したものではないとはいえ、来信の文面から相手が羽柴に期待していたことがらや、羽柴が相手に求めていることがらを推測することは可能で、羽柴雄輔を知る好資料といえよう。

山形県鶴岡市郷土資料館には、かつて羽柴雄輔が所持していた羽柴宛ての書翰が、「国分文書」の

なかに多数包蔵されているが、そのなかに、真崎勇助からの書翰が四十通ほどある。明治二十三年十一月二十六日から明治三十二年六月八日までのもので、これらはすべて年月日順に並べられ糊付けされて、長い巻物のような形になっている。

真崎勇助とは天保十二年（一八四二）に生まれ大正六年（一九一七）に没した、かつての秋田藩士である。秋田市在住の郷土史家として知られ、早くから菅江真澄の業績に注目し真澄の著作の収集に功績のあった人である。羽柴より十歳ほど年長者である。二人の交流の契機は筆者には未詳であるが、真崎勇助も東京人類学会に入っていたために最初は『人類学雑誌』誌上で知り合い、同じ出羽国の郷土史家であるとともに出土遺物にも関心を持つ者同士として、交流が深まったのではないかと思われる。同資料館の羽柴関係の資料のなかには、真崎が送ったあごひげをたくわえた真崎勇助の写真もあるくらいだから、ということとは羽柴も送っているはずで、写真交換をするくらいだから、心許す交わりだったかと思われるのである。

真崎勇助からの書翰の内容は、時候の挨拶や互いの健康を喜んだり気づかう決まり文句のあと、本題に入り、「余ハ後音可申上候也」というような形で結ばれている。最後に、年月日や発信者名、宛名が記されていることはもちろんであるが、年月日については、真崎が月日のみしか記していない場合でも、羽柴が保管にあたってそれに年を補っている。すべて和紙に毛筆で記されたものであるが、急いで書いたこともあるらしい私信ゆえ、乱暴な筆致の書翰も含まれており、判読しがたい部分もみ

られる。

さて、約九カ年にわたる四十通ほどの書翰に盛られている内容を筆者なりに類別すると、左のようになる。

(1) 出土遺物関係 (2) 古銭関係 (3) 絵画・墨跡関係 (4) 古書関係 (5) 民俗関係 (6) 奥羽

人類学会関係 (7) 身辺報告

以下、これらについていくらか敷衍したい。

(1) 出土遺物関係 出土遺物そのものの贈与交換や、出土遺物に関しての意見交換が最も多いように思われる。現品にかぎらず、これらの写生図も見せあっている。例えば、

御地之石鏃拾個御恵投被成下云々(明23・11・21) これは明治二十三年十一月二十日付の書翰であることを示す。以下、括弧内同じ) 当地方に而祝部土器出る由なれ共いまだ完全なるもの者見候事も

無之候ハハ九州地方よりお取寄土器重複等二付御恵与被下候旨云々(明25・4・20) 栃木鐙伊

氏藏石図埼玉真観寺古物出現図者所蔵仕不申候云々(明23・9・15)

というような調子で真崎が返書をしたためていることから、羽柴が積極的に所蔵品の一部を贈与していることがわかるが、真崎からもこれへの返礼品がしばしばなされている。また、羽柴の所蔵品は単に羽前(山形県)のものに限らず、全国におよんでいたことが推測できるのである。いま詳しく述べることができないが、羽柴の所蔵していた書翰から、真崎と交わしたのと同様に全国の考古学に関心

を寄せる人士と意見交換をしていたことがわかり、その過程で入手した品物も多かったのである。右に挙げた以外で、真崎の書翰に現われる出土遺物名（写真図も含む）をアットランダムに記してみると、壺、朝鮮の石剣、石器、祝い瓶土器、石匕、石斧、古代の直刀、土偶、水晶の釵頭などがある。これらには羽柴が当時『人類学雑誌』に発表した論文や報告に取り上げられているものもあり、羽柴・真崎兩人にとってはホットな話題だったかと思われる。

(2)古銭関係　銅銭、鉛銭、琉球古銭、銀判（之摺形）なども実にしばしば登場している。のみならず、藩札の収集もしていたらしく何度も話題になっている。紙幣や切手にも関心を寄せていたらしい。古銭には出土品も含まれていたのかもしれない。

(3)絵画・墨跡関係　明治二十三年十一月二十八日にしたためた来信には次のように記されている。

過般古画本御無心申上候処御承諾三冊早速御送付被下而正二拝受仕候実ニ古佳なるものにて誠ニ楽罷在申候深く奉謝候

真崎の乞いに応じて羽柴が古画本三冊を送ったことへの礼状であるが、それにつづけて真崎は、手許にある平田篤胤書草稿を一枚送付する旨記している。このように漢詩・和歌・発句をしたためたものの交換、それらについての意見交換などもしている。真崎は当時、「秋田諸家人名録」を編纂中だったらしく、関連して秋田における有名人士の遺墨遺書の収録が進んでいることも書き送っている（明27・2・13）。それに対して羽柴も自分の収集をやや自慢気に語ったらしく、真崎は「古筆帖三帖御仕

立二相成一千年前之書より当今人之書迄御蒐集二相成候旨誠ニ御丹精ニ御座候」(明29)・1・6)として感心してみせたりしている。つづけて、自分の呈した書(あるいは書翰)までも帳付されて保管されているらしいことに触れ(いま小稿で分析しているのはこれらの書翰である)、汗面の至りだと述べ、万更でもない様子でもある。

なお、明治二十六年六月二日には、真崎が岩手県の「はんじゑ曆」(明治二十三年版)を送っている。これは、いわゆる盲曆であろう。

(4)古書関係 書物に関する意見交換や古書所持者の紹介などもしあっているが、小稿にとって重要なことは、このなかで羽柴が菅江真澄についての情報を得たことである。明治二十六年の六月であった。

明治二十六年六月二日付の来信に、次のように記されている。

先般月の出羽路之儀ニ付御尋被下早速御答可申上候処終延引仕候 右著者ハ歌人にして菅江真澄といふ天明四年初而秋田へ入りたる人と相見得候三河ノ国ノ人ト申事ニ候 月の出羽路(秋田県仙北郡)式拾四冊と心得候又雪の出羽路(公平鹿郡)拾四冊と覚へ居候其他数冊あり いづれも名所旧跡等を書たるものにて都合八拾五冊秋田県庁之備ニ御座候 原書ハ旧藩主所蔵ニ有之是者真蹟ニ而本県之分ハ右を写たるものに候俗ニ真澄遊覧記と唱居候即チ此本之物称ニ御座候 別紙写

□上候御覽被下度候

羽柴は自らの古書収集の過程でいわゆる月の出羽路のことを知り、真崎に照会したものと思われ、右はそれに対する返書である。ここで真崎は、菅江真澄とその著書群のあらましを紹介するとともに、別紙として所蔵本の一部を書写して送った。その別紙と思われるものが返書に付して保存されている。内容は「齋田濃刈寝」の表紙と、最初の三日分（すなわち天明四年九月十日・十一日・十二日の全文）で、そのあとに真崎は左のように解説している。

右秋田のかり寝 菅江真澄真蹟ニシテ小生蔵本ニ御座候 美の紙の小冊にして枚数三十五枚斗有之申候 二十五日に者三碓阪に至るとあり其前ハ御地方之事を認たる日記ニ御座候（中略）右本ハ当秋田県之書之外ノものニ御座候 旧藩有之分ニも無之筈ニ御座候

この来信とそれに付された別紙によつて、羽柴雄輔は菅江真澄とその著書群を知り、その一部「あきたのかりね」の原文にも触れたのである。「あきたのかりね」は、かつて尋常小学校訓導として赴任していたことのある鼠ヶ関の地から書き始められており、羽柴はなつかしさをおぼえたとともに、菅江真澄のことを脳裏に刻み込んだことと思われる。

その後、羽柴は、知人に依頼して「あきたのかりね」全文の書写を思いたち、真崎もその願いを入れて協力を約束したのであったが、諸般の事情で実現はしなかつたようである。羽柴が「あきたのかりね」を自ら書写するのは明治四十五年であるが、それについては後述したい。

この時期、真崎勇助が「秋田諸家人名録」編纂のために県内有名人の遺墨遺書類の収集に奔走して

いたことは先に触れたが、そのなかには菅江真澄関係の資料も多く含まれていたと思われる。真崎は明治三十一年に「菅江真澄翁履歴」「菅江真澄翁和歌」「菅江真澄翁著書目録」を纏めており、羽柴が照会したのは、幸いにも、このように真崎が真澄研究に没頭していたと思われる時期だったのである。

(5) 民俗関係　羽柴は『鼠関日記』にも民俗の記録を残しているし、『人類学雑誌』にも婚姻習俗や年中行事など十余にわたる民俗関係の報告を発表し、民俗にも並々ならぬ関心を抱いていた。晩年、柳田国男と知り合ってから、『郷土研究』にも庄内の地蔵に関する興味深い伝承やオースケコースケについての報告を寄稿している。

真崎への書翰においても民俗について触れることがあつたらしく、真崎は羽柴に触発されるかたちで、また羽柴からの質問に答えるかたちで、いくつかの秋田の民俗を書き送っている。その内容は、次のような内容であつた。

子供が虫を捕らえるときの歌　子供が雁行を見て囃したときの歌　唾による占い　鬼

ごっこの際の鬼の決めかた

右は明治二十四年十月十四日付の来信に記されているが、この来信には蘇民将来のことは当地にはない旨も述べられているので、羽柴はそのような質問もしたのであろう。翌二十五年の数通の書翰には、数回にわたってカテ飯に用いるカテの材料が比較的詳しく述べられているし、各種の俗信についても記されている。「女兒の間ニ行るる手毬歌ハ追而可申上候」(明25・4・15)ともあり、両者のあ

いだでさまざまな民俗が話題になっていたことがわかる。そして、これらに積極的であったのは、筆者が思うに羽柴雄輔の方であった。

(6)奥羽人類学会関係　羽柴が庄内の地において奥羽人類学会を創設したのは明治二十三年十一月のことである。会長には松森胤保を迎え、運営事務全般は羽柴が執った。鶴岡市郷土資料館蔵の「国分文書」中の羽柴雄輔関係の一括資料の中には、この学会について触れた坪井正五郎や神田孝平、鳥居龍蔵、白井光太郎、若林勝邦等の書翰が含まれており、奥羽人類学会は、中央の人類学会とも連繫を保ちつつ東北地方各地に会員を募って発展したのである。この奥羽人類学会は、明治時代の地方における新たな学問潮流を考える際に興味深い分析対象になるかと思うが、小稿の目的からはずれ、小稿ではそこまで述べる余裕はないので、羽柴と真崎との関係に限定して述べておきたい。

羽柴はこの会に真崎の入会を誘い、会則を送っている。真崎にとつても関心のある研究分野なので、当然入会はしているが（羽柴は真崎に名誉会員として入ってもらいたかつたらしいが、真崎は遠慮している）、そののみならず、真崎は書翰のなかで自らの周辺にいる人々を次々と羽柴に紹介し、羽柴の活動を援助している。石川理紀之助が入会したか否か筆者は詳しく調べていないが、真崎の書翰には秋田の篤農家として著名な石川理紀之助の名も見える。真崎書翰には狩野徳蔵の名もしばしば現われている。狩野も奥羽人類学会との関連で紹介したのかと思われるが、羽柴に対して遺墨古書の所持者として交際するよう熱心に勧めている。羽柴と狩野との具体的な交流事実は未詳であるが、もしあったとすれ

ば、狩野徳蔵の兄の狩野良知には「真澄伝」の著もあるようなので、羽柴は、狩野徳蔵からも真澄についての知識を得た可能性が推測されるのである。

(7) 身辺報告　健康を害したことへの互いのいたわりの文言も多く見られる。先に触れたように羽柴は日本家禽協会へ入会したことを知らせたようで、その返事として、秋田でも養鶏が大流行している旨書き送っている。しかし、羽柴が仕事として取り組んでいた園芸に関する内容は皆無に近い。家族の動静に関しても、ほとんど触れられていない。私信の往来といえども、今までみてきたような学術や趣味の分野に限っていたといえよう。

そういうなかでも身辺について全く触れられていないわけではない。明治二十七年八月二十六日朝からの秋田市を襲った洪水にて床上浸水し、はなはだ困った旨が記されているし(明27・9・2)、旧藩主が来県したためその世話などで多忙をきわめ、奥羽人類学会誌への投稿が間に合わなかったの言い訳などもなされている。

以上、真崎勇助からの羽柴宛来信に基づいて羽柴雄輔の関心のありようを照射してみた。これに対する羽柴から真崎宛の書翰も現存していれば羽柴研究上またとない資料となるのであるが、秋田県の大館市立図書館に保蔵されている真崎勇助宛の多くの書翰のなかには、筆者の調べたかぎり羽柴からの来信が見当たらないのは残念である。

三、柳田国男と羽柴雄輔

明治三十六年九月まで園芸に従事した羽柴雄輔は、その後三年あまり鶴岡普通学会というところで講師として勤めたあと上京し、すでに述べたように、明治三十九年十一月二十二日付で東京大学史料編纂所に写字生として採用された。ここには大正二年十月二十七日まで勤め、あとは死没する大正十年まで、慶応義塾大学図書館において筆写生として働いた。上京後のこの十五年間、すなわち五十歳半ばから七十歳までの羽柴は、勤務に精励したのであるが、同時に、残されている羽柴宛の来信類から判断するに、東京人類学会の会員をはじめ多くの人々と交流を持った。そのなかで小稿に直接関わるのは、山中共古と柳田国男である。⁽¹⁵⁾

山中共古は嘉永三年（一八五〇）に生まれ、昭和三年（一九二八）に没した。羽柴より一歳だけ年上で、同じ時代を生きた人といえる。維新まで御家人として江戸城に勤め、その後は牧師となった。同時に随筆家としても知られる。蔵書家であるとともに、考古・民俗等にも興味を持ち、柳田の『石神問答』の主要な問答相手であった。鶴岡市郷土資料館の羽柴雄輔関係の一括資料によって明治二十年代半ばから書信を交わしていたことがわかり、羽柴とは早くから交流があった。明治三十九年十一月二十九日から大正元年九月二十四日までの三十九通の羽柴宛書翰は、羽柴によって、『雅友手翰』として冊

子形式に綴られ保管されていた。⁽¹⁶⁾ 自らの書翰が相手方にこのような形で保管されることは山中の願いでもあったが、内容には当時の知識人のディレッタントンティズムが遺憾なく發揮されていて、興味津々たるものがある。

羽柴が柳田国男に初めて会ったのは、その山中共古に紹介されてであった。柳田の方から接近を求めて山中に仲介を依頼したのであるが、その事實は、左のような明治四十三年五月二十六日付の山中から羽柴宛の書翰にて明らかである。

此程法学士柳田国男氏久振にて参られ(中略) 同氏ハ御承知之事とは存知候が(中略) 官吏には珍敷御方ニ御座候 同氏奥羽風俗ニ関シ貴君ニ拝眉致し度被申居候間 御招介仕置候^(ママ)

まもなく二人が相見えたとすれば、柳田が羽柴に初めて会ったのは明治四十三年の夏ごろということになる。柳田が羽柴に接近しようとしたのにはいくつかの理由が考えられる。一つは、『人類学雑誌』に発表した諸論考を読んで民俗関係にも関心を持つ同学の人と認めていたこと。これは右の山中の書翰からもうかがえる。二つ目は史料編纂所の写字生としての経歴。三つ目は蔵書家であることである。羽柴が蔵書家であることは、同じく蔵書家でその蔵書を柳田が何冊も借覧している山中共古から十分に聞きおよんでいたことと思われる。後年、柳田は羽柴について次のように述懐している。

十年余前まで存命であつた羽柴雄輔翁は、ちやうど土佐の吉村氏に匹敵すべき精力家で、自身膽寫した故郷の著述類で、その東京の住居は見うごきも出来ぬ位であつた。⁽¹⁷⁾

考えられる右の三つの理由のうち、小稿に直接かわるのは、写字生としての経歴と蔵書家であったことである。ではなぜ、柳田はこの二点に注目したのであるか。それを述べるには、まず、柳田と「諸国叢書」について概述しておく必要がある。

柳田国男が少年時代から読書家であったことはよく知られているが、明治三十年代後半、職務から内閣文庫にふれるようになってからは、すでに関心を持ち始めていた民俗関係の内容を多く含む古書の選択保存という問題意識も、強く持つようになっていた。そして、明治四十年代に入って、それを個人として企てようと決意した。大正四年、「古書保存と郷土」と題する一文において、古書保存会の人々に対し保存すべき有用な書物に関する自説を開陳したあと、次のように述べている。

何とぞ今まで所在の知れぬ古書の所在目録、殊には一つしか無い稿本の行く／＼亡び去らんとする者を取留める方に掛つて貰ひ申したい。複本の作製も勿論急務である。刊行会の手には合はぬ一地方の著書などは、筆工を以て版工に代へねばならぬかも知れぬ。自筆本で無ければ大切で無いと云ふやうな骨董癖は断念すべきものであらう。しかし複製の事業は中々急に普及しさうも無い。是は会員中の篤志者にも分担せしめられて宜しからう。自分なども先年来『諸国叢書』と云ふもの始めて居る。即ち地方無名氏の遺著の稿本で伝写の少なさうなものを、一部づつ写して行く仕事である。もう早三四十部は出来た。⁽¹⁸⁾

「諸国叢書」編纂の意図は、右の文章に尽くされている。大正四年の段階ですでに三十〜四十種分

の筆写が完了しているというが、その後も充実させつづけ、現在、成城大学民俗学研究所の「柳田文庫」には、「諸国叢書 〇〇」(〇〇のところには各冊の題がしたためられている)という題簽が柳田国男の筆跡で付された和袋本が、百十三冊架蔵されている⁽¹⁹⁾。

胸中に右のような企画を秘めていた柳田にとつて、民俗にも関心を持つうえに蔵書家であり、かつ史料編纂所の写生字でもある羽柴雄輔は、またとないよきパートナーと映つたのであろう。鶴岡市郷土資料館所蔵「国分文書」中の「柳田国男↓羽柴雄輔」資料は、明治四十五年(大正元年)に柳田が羽柴宛にしたための書翰を国分剛二がペン書きで写し取つて保管したものであるうが、それを見ると、当時の柳田の抱負と羽柴に対する期待の大きさがよくわかる。少々乱暴な筆写であるためたいへん読みづらいが、大意を述べてみよう。

七月二十一日夕付書翰 庄内地方の祠官の子である辻与四郎という国学院の学生から、庄内の安部氏の「筆の餘」十余巻のことを知つたが、その巻末の「郡中雜記」はぜひみたい。あなたがご所持なら借覧したい。内閣文庫内の江戸人の随筆などは内容に孫引きが多く、つまらぬものまで保管している。一方、地方の学者の著は子孫の心掛けが十分でなければ散逸してしまふおそれがあり、何とか随筆・地誌類を筆写して保存したいと思つている。奥羽地方は民俗に面白いものがあるので、「郡中雜記」も一読のうえ筆写して残しておきたい。

七月二十三日付書翰(筆写注…これは右の書翰に対して羽柴がすぐ詳しい返書をしたためその返書を読んで

すぐ記したものであろう。あなたの精力には敬嘆のほかはない。「郡中雜記」のあとには、あなたご所持の古書目録を拝見したい。また、よいものがあつたらぜひ筆写してほしい。私のところには新たに筆写を依頼した書物がだいぶ揃ったが、此よりは『諸国叢書』とでも名づけ同型の本にて沢山蒐集致すようにしたい。他の地方の書物でも適当なものがあつたらお願いしたい。「大泉百話」などなつかしい。

要するに、庄内地方を中心とした古書類について教えを乞いつつ、羽柴が所蔵するものについては筆写をも依頼しようしている。右の諸書翰には見えないが、このようなやりとりのなかで、菅江真澄の名が出たことは推測に難くないのである。

羽柴雄輔は柳田の期待に見事応えて、大正元年から同三年までの足かけ三年間に十三点もの古書を誠実に筆写し、柳田に呈している。「諸国叢書」に収められたものには内閣文庫からの筆写本が多いのであるが、羽柴の筆写したのは、二、三の山中共古や三村竹清の所蔵本を除けば、羽柴自身の家蔵本を筆写原本にしているのである。そして、逐一次のような奥書を記している。

右玄察物語一卷為柳田先生囑以家蔵本謄写焉家蔵本者以肥後国阿蘇郡北小国村北里栄喜氏蔵本所
謄写也 大正二年二月三日 古香羽柴雄輔久明（花押） 同年同日八日校了

ちなみに、この『玄察物語』は戦国期の阿蘇大宮司の家臣である甲斐宗運の軍記物語とすべき書で、内閣文庫や帝国図書館には所蔵されていなかったようである。羽柴がその存在と価値を柳田に知らせ、

筆写して呈したのである。「諸国叢書」中の『玄察物語』には柳田のコメントが付されており、柳田はこの書を丁寧にしたものと思われる。このように、羽柴は単なる筆写者にとどまらず、柳田に刺激を与え、時には蒙をも啓いてくれる重要な協力者だったのである。

さて、話を菅江真澄に戻し、小稿を終えたい。「諸国叢書」には、『鰐田乃莉寝』をはじめ、『筆のまにまに』上・中・下、『真澄隨筆』、『真澄遊覧記』、『真澄遊覧記逸』、『真澄遊覧記続』一・二など十冊近くの真澄関係の資料が含まれている。各冊には内閣文庫にもある真澄の日記紀行文がいくつも収録されているのであるが（これらの多くは内閣文庫所蔵のものを誰かに筆写依頼したのである）、唯一、『鰐田乃莉寝』だけは羽柴雄輔が筆写したものであり、これは内閣文庫に架蔵されていないものであった。『鰐田乃莉寝』の奥書には、羽柴の自筆で左のように記されている。

右菅江真澄箸^(ママ)鰐田莉寝一冊以秋田市東根小屋町真崎勇助君珍藏菅江氏自筆本臨写校了 明治四十五年一月廿七日 古香羽柴雄輔（花押）

右為 柳田先生囑 大正二年四月八日騰写了同月十二日校了 古香久明（花押）（筆写注：古香は羽柴の雅号）

すなわち、羽柴が旧知の真崎が所蔵する真澄の自筆本を筆写し（なぜこのときに筆写を思いついたかは未詳）、それを柳田の依頼によってさらに筆写したというのである。この「あきたのかりね」は内閣文庫には架蔵されておらず、柳田は羽柴によって初めて知った書物と思われる。一読後、柳田は次の

ようなコメントを付している。

真澄遊覧記三十余卷内閣文庫ニ之ヲ蔵ス完本ニ非サルナリ 大曲図書館ニ一本アリ其他羽後ニ之ヲ蔵スル家アリトイフモ未ダ同異ヲ知ラズ 此卷ハ思フニ夙ク逸シタリシモノ他ノ諸卷ノ如ク精細ナル挿画ナシトイフハ注意スヘキコトナリ 菅江真澄ハ三河宝飫郡ノ人文政十二年羽後ノ客中ニ没ス 秋田ノ寺内村香炉木橋ノ上ナル村ノ墓山ニ其墓アリ 齡七十六又ハ七ナリキト云ヘハ其郷里ヲ出テタル天明三年ハ三十前後ナリ 爾來五十年ニ近キ間常ニ故郷ヲ懷ヒツ、終ニ歸ルコト能ハサリシハ思フニ深キ仔細アリシコトナルヘシ 此日記ハ蚶瀉最後ノ記事ナラン恰モ紅楓ノ盛ニシテ淋シキ雨ニ逢ヒ矢鳥西馬音内ノ山越ニ雪ニアフナト之ヲ尋常風流ノ徒ノ紀行トスルモ情趣ノ極メテ掬スヘキモノアリ況ヤ天涯ノ孤客多恨ノ才子カ長キ旅ノ記念ナリ(筆者注…のちに「記念ヲヤ」と訂正) 汐越既ニ荒レテ鳥海ノ雪ハ千古ナリ人海ノ風浪鷗縁覓メ難シ 斯生誠ニ悠ナリ回向セサルヘケンヤ 大正二年五月二十二日 柳田国男誌

ここには柳田国男の初期の真澄観が表われていて興味深いが、それとは別に、羽柴が筆写して渡した『齧田乃菫寝』によって、柳田は初めて内閣文庫蔵のとは異なる真澄の日記風紀行文の現存することを知ったのである。内閣文庫架蔵の「真澄遊覧記」の第一冊目(目次)の奥書きには、架蔵本以外にも同種の書物の存在が(地誌課の)中邨元起によって予想されている。そのため、柳田も内閣文庫のが完本ではないと述べているのであろうが、羽柴との交流によって、架蔵本以外にも実在すること

が確認されたのであった。このように、真澄の著作が、内閣文庫架蔵のもののみでなく、現地には他にも現存していることを知った意味は大きいと思う。

ここにおいて、柳田は、現地における涉猟次第では、さらに多くの日記風紀行文の存在を知ることができるかと期待に胸ふくらませたはずであり、内閣文庫本で理解していた以外の新たな真澄の諸業績の発見に向け、さらには、真澄の人となりに対しさらに興味を持つていったと思われる。そして、柳田の菅江真澄研究に拍車がかかっていったと思われ、その意味で、真澄研究史上羽柴雄輔の存在は無視できないのである。なお、これはあくまでも推測であるが、コメントにある大曲図書館の一本の存在や羽後に真澄の書を蔵する家のあることも、羽柴によつて教えられた可能性を否定できない。生没年や墓地についても同様である。

羽柴雄輔は、柳田国男の菅江真澄に対する関心を、内閣文庫架蔵本の範囲から現地に埋没している可能性のある諸書にまで向けさせる上で、刺激を与えた人物といえる。柳田が新たな『真澄発見』を果たした背後には、羽柴雄輔の存在があったのである。

(小稿をなすにあたり、鶴岡市郷土資料館の秋保良氏、同市史編纂室の堀司朗氏、および大館市立図書館の渡部孝夫氏にはたいへんお世話になった。記して感謝申しあげます。)

- (1) 磯沼重治編『菅江真澄研究の軌跡』岩田書院 平10・9
- (2) 『定本柳田国男集』三 筑摩書房 昭38・7 所収
- (3) 『定本柳田国男集』二 筑摩書房 昭43・7 一七四―一七七ページ
- (4) 『定本柳田国男集』一三三 筑摩書房 昭39・2 一三三ページ
- (5) 『諸国叢書』については、田中・吉原・森田・川部『諸国叢書』目録・拙稿『諸国叢書』と柳田国男『成城大学民俗学研究所紀要』一七 所収 参照。
- (6) 『松山町史』下 平元・9 五九六―六〇一ページ 以下、ところどころこれを参考にした。
- (7) この松森胤保という人物は、明治維新前は長坂欣之助と称し、松嶺藩の家老職にあつた人物で、薩摩藩邸焼打ちの際には一方の大將をつとめた。羽柴雄輔に大きな影響を与えたことは、後述するように、後年、羽柴が奥羽人類学会を興すにあたり、松森を会長に推戴していることからわかる。
- (8) 羽柴雄輔の学歴・職歴等の正確な履歴の調査にあたっては、東京大学史料編纂所教授橋本政宣氏のお世話になつた。記して御礼申しあげます。
- (9) 前掲註(6)同書 五九八ページ
- (10) 『鼠関日記』は、『諸国叢書』第八輯(成城大学民俗学研究所 平3・3)に収録されている。
- (11) 上京にあつては、神田孝平が何らかの形で力になつたようである(国分剛二「下沢保躬と羽柴雄輔の交遊」『思遠会会報』五)。
- (12) 「国分文書」には、鶴岡出身の郷土史家国分剛二旧蔵資料が収められている。国分剛二は東京において郷里の先輩である羽柴雄輔と交遊があつたので、「国分文書」の中に羽柴が生前に保管していた來信類が多数含まれることになつたのである。

- (13) 前掲註(1)同書 三三二ページ
- (14) 前掲註(1)同書 三三三ページ なお、狩野良知は、書画鑑定にも詳しい特異な学者として知られる狩野亨吉の父である。
- (15) 以下のことは、前掲註(5)の拙稿において触れた部分もある。
- (16) これらは『山中笑翁手簡』(『成城大学民俗学研究所紀要』一七別冊 平4・8)として公表されている。なお、『山中笑翁書簡』の翻刻文の中で、第1信を明治二十九年としているのは、第三十九年の誤りであろう。
- (17) 前掲註(4)同書 一七五ページ
- (18) 前掲註(4)同書 一六五ページ
- (19) 『諸国叢書』の全体像については、前掲註(5)参照。